

a90022

PRP等を応用した顎顔面形態修正処置 1症例 ～顔貌形態測定とGBR角度の変化～¹一般社団法人東京形成歯科研究会増木 英郎¹, 磯邊 和重¹, 田中 かずさ¹, 江崎 友大¹, 鈴木 富士雄¹, 鈴木 正史¹, 木下 三博¹, 奥寺 元¹

目的：欠損部位の義歯床部やロングスパンBRIDGEにおいては、経年的に骨吸収が行なわれインプラント埋入のみにかかわらず顔貌の変化を起こす。顎欠損は顔貌の形態構成に影響を与え、アンチエイジング上問題がある欠損顔貌に顎再建すれば顔貌の変化を与える。今回そのような症例に対してPRP由来物質を応用し、迅速に安全に組織の再生を行い、合わせて顔貌等の変化を確認できたので報告いたします。

材料および方法：私どもは歯槽骨及び歯肉形態修正において、自己血由来の多血小板血漿（PRP）または多血小板フィブリン（PRF）が持つ特徴を踏まえて、治癒促進や審美を求めた形態再生の効果を追求してきた。そのPRPの製作は上腕の正中静脈から40～60mLの末梢血を採取し、同一の血液から遠心分離にかけ、PRP・PRFなど数種類の血小板濃縮生体材料を血小板濃縮調製する。患者は65歳女性で全身状況は問題がなく、3本のインプラントを10年前に埋入し、その後、天然歯3本抜歯、前歯部3本欠損の暫定のロングスパンインプラントBRIDGEを8年前に装着、抜歯含めて8年が経過。骨欠損はMISCHの分類でDivision C-hであり、側貌顔貌の鼻唇角に影響を及ぼしている。そのPRP・PRFとガラス管と10%アルギン酸を10%塩化カルシウムに反応させたFibrinClotを骨補填材バイオス^R及び吸収性HAをまぜ、それを組織再生物質3D形態形成器により骨欠損部に合わせた形態を作り、患部に挿入し縫合後治癒を待ち、三カ月後に顔貌写真を長岡式顔貌計測で測定合わせて木下式GBR角度測定で検証を行った。尚、処置・発表に際して本人より同意を得た。

結果：挿入後の治癒は一般のGBRと同様に順調に治癒促進され、目的部位はCT画像においても骨増殖がみられた。また顔貌計測、GBR角度においても平均で治療前後、+13.42度と明らかな差が観察された。

考察および結論：この1ケースの顎欠損は顔貌の形態構成に影響を与え、アンチエイジング上問題があった症例で、本人も口先がとがったアヒルの唇である側貌間を気にしていた。その鼻唇角を改善することで側貌間が変化し、患者も満足している。従来この分野は義歯床などでおこなってきたが、骨再生の技術により生体にマッチした改善が可能となった。このことは顎顔面審美上、新たな意義がある治療法であると考えられる。

1 case of maxilla facial surgical procedure which applies the PRP, etc. ~Different adjuvants of facial form measurement and GBR angle of before and after~

